

バイオベンチャー2015（後編）

特集によせて

新城 雅子¹・小川亜希子²

日本でもバイオベンチャーが産業における研究開発の原動力になる時代になってきた。前号と本号連載のバイオベンチャー特集を企画し、独自のビジョンを持ち、しなやかにしたたかにビジネスを展開されている10社にご執筆を依頼した。今、上昇気流に乗ってご多忙のベンチャー企業代表の方、全員が執筆を快諾くださったのは嬉しい驚きでもあった。この機会をまたビジネスの啓発、拡大の一つの機会として読者、著者双方をつなぎ、将来の可能性を広げるきっかけになればと願っている。今回の後編では、創業系ベンチャー4社、さらにベンチャー起業・経営支援の2社の方々からご寄稿いただいた。

まずは、ベンチャーの起業、持続的な運営を支える三菱UFJキャピタルでご活躍の長谷川宏之氏である。前歴として10年にわたり製薬企業で市販後業務、市販後臨床試験、医師主導臨床研究・治験業務をご経験後、現職の金融機関系ベンチャーキャピタル（VC）部門に転職された。VCは、「投資とともに経営支援・営業支援も行い、ベンチャーの企業価値向上に貢献」する。バイオ医薬品研究の多くを担ったバイオベンチャー支援におけるVCの貢献は大きい。長谷川氏が語る「日本のバイオベンチャーの課題」には、事業成功のヒント満載である。

次は、1999年設立の“遺伝子治療・核酸医薬”のスペシャリストであるアンジェスMG代表の山田英氏である。創業者は大阪大学大学院医学研究科の森下竜一教授である。森下氏は1990年初頭、米国留学中に学生が起業する姿に触発された。世界でのバイオベンチャーの先駆けであるジェネンテックの創業（1976年）から23年、日本でも時代の先端医療を実現したいと起業された。症例数不足から申請続行が危ぶまれたそうだが、“再生医療等製品の条件及び期限付承認制度”という波がきた。遺伝子治療のグローバルリーダーを目指す今後が楽しみだ。

続いては、2001年設立の“細胞シート再生医療・再生医療支援”事業を展開するセルシード代表の橋本せつこ氏である。橋本氏がつないだ研究とビジネスとの懸け橋は大きな功績である。橋本氏はスウェーデン大使館ライフサイエンスの投資担当時、カロリンスカ研究所と細胞シート作成技術を開発した東京女子医科大学をつないだ。その縁で、2014年にセルシードに社長として入社し、再生医療の最重要拠点と位置づける日本で、サイエンス

をビジネスに変換するモーターを始動させた。日本で潜在患者2500万人に上る変形性膝関節症の治療など再生医療に希望の光を当ててくれる日が来ると期待される。

大学発ベンチャー1000社構想が提出された2001年に創業したインタープロテイン（“タンパク質相互作用PPI標的創薬”事業）に、前職のキリンアムジェンから2005年に入社された細田雅人氏（現代表）にジェットコースターのようなベンチャービジネス経験をご紹介いただいた。細田氏が、未踏の山が眼前にあり、そこで燃えるようなテーマに出会ったと感じて入社を決断したのは2005年、その翌年に「そんな気持ちは吹っ飛んだ」という出来事とは何だったのか、そしてターニングポイントは何だったのか、じっくりと話しを伺ってみよう。

同じく大学発ベンチャー、ペプチドリームは2006年に誕生した。研究成果の特許出願に合わせての起業とのこと。経営者である筆者窪田規一氏をシンクタンクが選定するという周到な準備でスタートしている。3つの中心技術・特許を武器に、“特殊ペプチド”という多様性に富むライブラリーを構築し、現在花盛りの抗体医薬の次の世代の「成功するビジネス」を目指し、邁進中だ。VCからの資金提供に依存せず早期に黒字を達成したそのビジネスモデルは何だったのか、生物学の常識を覆す技術の開発がなぜ成し遂げられたのか、興味が尽きない。

最後は、“シリコンバレー”を本拠地にライフサイエンス分野の研究開発を支援するRainbow Bioscienceの千田一貴氏である。日本および米国の製薬研究時代を経て、世界のベンチャー起業のメッカに移り住み、コンサルテーションを始めた千田氏から、日本でベンチャーを起業したい、または起業後もがいている人へのメッセージをお願いした。“Precision Medicine”をキーワードに、日本の数年から十数年先を走る米国のバイオ・ヘルスケア産業の動向と将来像について紹介いただいた。

この「特集によせて」を記述中の10月初旬、日本人のノーベル賞受賞ニュースが連続で飛び込んできた。生物工学分野でも馴染み深い大村智先生（生理学・医学賞）と梶田隆章先生（物理学賞）である。偉大な基礎研究があつてこそ、革新的な応用がもたらされる。バイオベンチャーが今後益々、日本、世界の変革の担い手として重要になることは間違いない。2016年もバイオベンチャーから目が離せない。

著者紹介 ¹奈良先端科学技術大学院大学（客員教授） E-mail: shinjoh@bs.naist.jp

²鈴鹿工業高等学校生物応用化学科（講師） E-mail: ogawa@chem.suzuka-ct.ac.jp